

下川町はどんなマチ？

- ◇ エリア：北海道上川郡下川町
- ◇ 人口：3000人強
- ◇ 挑戦の歴史と下川らしさ：

これぞ、今も町民に代々受け継がれ、大事にされている「しもかわイズム」！



- 1901年（明治34年）の開拓から約120年、本町の先人たちは、豊かな自然資源を活かしてまちの基盤を築いてきた
- この間、農業・林業・鉱業などの基幹産業の衰退による1970年代から1980年代にかけての急激な人口減少や2000年代の市町村合併問題など、幾多の危機や困難に対して、先人たちは不屈の精神で立ち向かい、乗り越え、発展させて今に引き継いでいる
- こうした先人たちと築いてきた歴史や文化の中で、危機や困難に、知恵、工夫、行動を最大限に発揮する”挑戦”、多様な人々を受け入れる”包容力と寛容性”、森林づくりなど100年先を見据える”先見性”、未価値から新たな価値を生み出す”創造性”など、「下川らしさ」が育まれてきた

参照：2030年における下川町のありたい姿



下川町はどんなマチ？

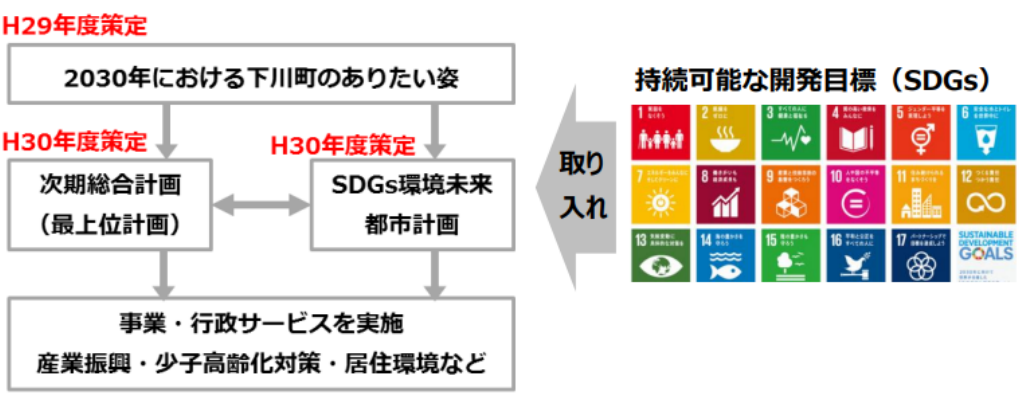
◇ 第1回「ジャパンSDGsアワード」総理大臣賞を受賞！

2017年12月26日に受賞。「持続可能な地域社会の実現」を目指し、取り組んできた結果、人口減少緩和や地域熱自給率向上などの好傾向が発言していることや、多様な主体を巻き込みながら実現していく考えなどが評価され、受賞に至った。



参照：下川町HP

◇ 「2030年における下川町のありたい姿」の策定



参照：下川町HP

目の前の課題解決だけの視点でまちづくりを進めるだけではなく、将来像となる本町の「ありたい姿」を描き、そこから現時点を振り返り、長期的、複眼的な視点でまちづくりを進めていく必要があるという考えのもと、策定された。詳細は次ページ。

下川町はどんなマチ？

2030年における下川町のありたい姿

～人と自然を未来へ繋ぐ「しもかわチャレンジ」(一部抜粋)～

(1) みんなで挑戦しつづけるまち

危機や困難に挑戦し続ける不屈の精神や多様な人々、価値観を受け入れる包容力、寛容性などの「下川らしさ」を体現するまち



(2) 誰ひとり取り残されないまち

すべての人が可能性を拡げ続けられ、居場所と出番があり、健やかに生きがいを感じて暮らせるまち



(3) 人も資源もお金も循環・持続するまち

人・自然資源(森林・水など)・お金などすべての永続的な循環・持続、農林業など産業のさらなる成長、食料、木材、エネルギーなどの地消地産により、自立・自律するまち



(4) みんなで思いやれる家族のようなまち

人とのつながりを大切に育み、お互いを思いやり、支え合って、安全で安心して住み続けられるまち



(5) 引き継がれた文化や資源を尊重し、新しい価値を生みだすまち

古くても大切なものは守り、新しい価値を生み出す「温故起新」のまち



下川町はどんなマチ？

◇バイオマスボイラー

現在下川町では、10基のバイオマスボイラーが地域に熱を供給している。下川町全体の熱自給率は56%。すでに年2.4億円以上の流出を止めている。さらに、全町のCO2を20%削減。

今後は、熱100%自給、電力の自給および、豊富な熱を利用した産業・起業を目指す。



◇持続可能な循環型森林経営

毎年、約50ヘクタールの森林を伐採し、約50ha植林している。

植林した木は、60年かけて成木に成長し、60年後に伐採。

約4,500ヘクタールの森林のうち、約3,000ヘクタールを占める人工林を、このような循環型の森林経営で活用。

下川町はいつまでも森林資源を利用し続けることができる。



参照：下川町HP

下川町はどんなマチ？

◇ ケータのケータリング

町内のスーパーが閉店したことをきっかけに、「町の『食』を請け負うことのできる事業者が必要」という思いからオープンしたお店。

できる限り地域内で採れた農作物を使って弁当や惣菜を販売、美味しいものをなるべく低価格で提供してお客様に満足していただきたいと日々奮闘中。また、プラゴミ削減にも取り組んでいる。



参照：下川町観光協会HP

◇ 下川りくらしネット



参照：有限会社イーズHP

下川りくらしネットは、町民委員として町のビジョン策定に携わったことをきっかけに2018年に結成された女性町民のグループで、持続可能で幸せな暮らしを目指し、自分たちができることに取り組んでいる。

「北海道産の大豆からつくられた豆腐を町内のお豆腐屋さんで買えるようにしよう」という『下川町道産大豆とうふプロジェクト』などを行っている。

2021年1月18日に1回目として、道産大豆の豆腐50丁を販売した。その後、用意した道産大豆がなくなるまで月1回のペースで4回、毎回75～100丁を販売することができた。

下川町はどんなマチ？

◇ 下川町産のいちご栽培

戸田建設株式会社は、地域活性化の新たな取り組みとして、2021年からイチゴの試験栽培を始めた。下川町の気候を活かし、流通量の少ない「夏イチゴ」の生産にチャレンジしている。



参照：SHIMOKAWA JINZAI BANK

◇ 下川ベアーズ



参照：下川町産業活性化支援機構
タウンプロモーション推進部HP

移住してきた人も、下川町で生まれ育った人も、「無いなら作ろう」が当たり前かのように、あちこちに眠る余白を、楽しんでいるように見える。そうした「無いなら作る」挑戦を、事業化を目指す仕組みとして整えた受け皿が「シモカワベアーズ」である。

「シモカワベアーズ」は、総務省が進める「地域おこし協力隊」制度を活用し、地域と関わり合いながら事業展開を目指すプロジェクト。2017年度にスタートし、これまでに5人の起業家が、東京や道内の他の地域から移住し、自分のお店を持ったり、事業を立ち上げている。